



居座られタン

陸奥

ある秋の夜の邂逅

俺はポケットからたばこを取り出して、火をつけた。吐き出した煙が宙に舞う。

最近になってようやく秋らしい気候になってきた。今年の残暑もなかなか長引いた。暑さに耐性の無い俺は苦々しい思いをしたものだ。汗に濡れてべっとりと肌に張り付くワイシャツ。今年で勤続10年目の夏、俺は企業戦士としてこれまで以上に奮起して仕事に励んでいた。しかし。

「人生とは、分からないものだな」

深夜の公園のベンチで俺は一人呟いた。公園には俺以外誰もいない。空を仰ぎ見てみた。東京の空に見える星の数は少ない。田舎の空にはごまんと輝いていた星が、少し場所を変えるだけで姿を隠してしまうのだな。こんな当たり前のことを考えたのは久しぶりだ。帰ってないな。田舎。久しぶりに帰ってみるのもいいかもしれない。それで何が変わるわけでもないが。

一か月前俺は会社をクビになった。大きな失敗をやらかしてしまったのだ。今まで順風満帆だった俺の人生にとって初めての挫折。まったく人生とはいつ何時座礁するかわからない。

解雇を言い渡されたときこそショックを受けていたが、次第に俺は冷静になった。不思議なものだ。どこか他人事のように思えた。俺はこんなに冷めた人間だったのか。

幸い貯金はそこそこあった。だからすぐに生活が逼迫するということはない。焦る必要はない。しかし求人誌に目を落としても、俺はその気になれなかった。俺は予想以上に高いプライドを有しているようだった。今まで一部上場企業でばりばり働いてきたという自負がある俺は、それ以下の会社で働く気になれなかったのだ。だいたいこの不況のご時世で、いかに立派な履歴を持っている俺でもまともな会社に就職できる保証はどこにもないのだ。

そんなわけで俺は現在漫然と無職生活を送っている。

いい機会だ。昔の友人に会ってみようかとも思った。地元の友人たちならば、俺が失職したこともいい笑いの種してくれるに違いない。いいさ。耐えられる。しかし、よく考えてみれば彼らの大半は家庭を持っている。そんな彼らの目にとって俺のような人間はどのように映るのだろうか。ただお互いに気まずい思いをするだけではないのか。俺は誰ともコンタクトを取ることをしなかった。

昼間に街中をぶらぶらするのは気がひけた。俺は怪しい身なりをしているわけではないが、もしかしたら職務質問を受けるかも知れない。そんなことになったら耐えられない。俺は今まで職務質問にあったことなんて一度もないのだ。ずっと優秀だったのだから。そう、俺はずっと失敗知らず。名は体を表す。優という名に違わず俺はずっと優秀な人間として世を渡ってきた。そうだ。俺は本来こんなことをしている人間ではないのだ。

コンビニの袋の中からウイスキーの瓶を取り出して、蓋を開けた。ぐいっと一口飲み込む。喉を熱い液体が通り過ぎていく。深夜の公園でこうしていることが最近の俺の日課になっている。まったく俺も落ちたものだな。しかしこうしているのも悪くない。俺は次第にそう思うようになっていた。俺はどこまで落ちていくのか。それを楽しんでいる気にすらなっていた。もう一口、もう一口と安酒を体内に吸収していく。

次第に気分がよくなってくる。目を瞑る。眠るつもりはないがしばらくこうしていよう。

風が心地よい。

眠気が襲ってきた。

俺はしばらく眠っていたようだ。

ふと気づくと人の気配がする。ゆっくりと目を開けた。

目の前に誰かが立っていた。顔がよく見えない。しかしそれはあたりが暗いからではない。ぶかぶかのパーカーのフードが頭をすっぽり覆いかぶさっているからからだ。B系ってやつか？なんだなんだ。流行りではないがオヤジ狩りではなかろうな。断じて俺はオヤジではないが。恐る恐る俺は目の前の人物に声をかけた。

「なにか」

「鷺崎優さんですね」

聞こえてきたのは意外にも女の声だ。こんな格好をする女か。怪しい。それ以上になぜ俺の名前を知っている。俺の知り合いか？

「たしかに俺の名前は鷺崎だが、俺になにか用か」

「そう。やっぱり。やっと見つけた」

女はフードの中で微かに笑ったようだった。やはり怪しいこの女。女でなければ声変わりのしていない中学生。

「鷺崎優さん。やっと見つけました。あなたのことをずっと探していたんです。よかった。しかも今日は満月だし。グッドタイミングだわ」

「なにを言っているんだ」

「何を言っているんだ。ふふ。何を言っているのかわからないでしょう。でもそれでいいの。あなたは何も知らなくて」

そう言うと女は小さな棒のようなものを取り出して何語かわからないが、日本語ではない言語でぶつぶつと呟き始めた。何を始めたのか分からず俺は呆気にとられた。

途端、体が動かなくなった！金縛りというやつか…！

「ふふ。うまくいったみたい。これであなたは私と繋がれた。あなたは私の思うようになる」

「なにを……言っているんだ……おま……え」

かろうじて口は動く。声は出る。

「なにをした……。俺に」

「ちょっとした呪いのようなものをかけさせてもらったのよ。パイプラインを繋いだの。あなたと私のね。それから行動の自由を奪ってる。それは分かったいるわよね」

「パイプ……ライン……？」

「そうよ。私がこの世界で生きていくための命綱のようなもの」

ますます分からない。命綱？なんのことだ。ライン。俺に繋がれただと。くそ。体が動かない。動け。動けよ。

「お前がなにをしようとしているのかは知らないが、俺のような人間を呪っても何の特もないぞ」

「そんな謙遜しなくていいのよ。私はあなたにこそ用があるのだから。そう、年収1000万以上の鷺崎優さん」

「年収一千万？は。なにか勘違いしていないか。俺がそれだけの収入を得ていたのは一ヶ月も前のことだぞ」

「え？なにを言っているの」

「俺はついこの間会社を解雇されたんだ」

「な、なんですって」

女は明らかに狼狽している様子だ。

すると体の緊張が解けた。女はその場にへたりこんでしまった。

「本当にあなた、無職なのね」

「そうだ。立派なニートってやつだよ」

「無職。無職」

無職無職とうるさい奴だな。まるで職務質問を受けている気になってきたぞ。

「これは困ったわ」

「なにが」

「私はあなたとパイプラインを繋いでしまった」

「だったら解けばいいだろ。というか、さっさと解いてくれ」

「それができるなら、とっくにそうしているわよ。私はこの呪術をかけることはできても外すことはできないの。正確にはその方法を知らないということだけだ」

「それは困ったことだな」

なにがなんだか分からないが、こいつの当ては外れたようだ。それならこいつの相手をしていることはない。俺はこの場を立ち去ることにした。いつまでも怪しい人間に関わっているつもりはない。

「ちょっとどこへ行く気よ」

「家に帰るのさ」

「そう。なら私もついて行くわ」

「なにを言ってる。お前はついてくるな。気色の悪い」

「なんですって」

女がさきほどの棒をかざすと、またもや体が動かなくなってしまった。

「なにを……する」

「あなた何も分かっていないわね。あなたは私の言うことに反することはできないのよ。だから私の言うことを聞きなさい。私をあなたの家にもてなしなさい」

「やなことだ」

「ならこうしてやる」

「ぐげ」

く、苦しい。首を絞められている。このままでは窒息死してしまう。死ぬのは嫌だ。死ぬ前にやっておきたいことがまだ山ほどあるのに。仕事仕事でやり残していることがこれでもかってほどあるのに。

「頼む……！ やめてくれ」

「私の言うこと聞く？」

「聞く！ 聞くとも」

「そう。なら許してあげる」

息ができる。よかった。まだ死なずにすむ。どうやらしばらくはこいつの言うことを聞いておいたほうが良いようだ。

「さ、案内しなさい」

部屋に着いた。女は「やっぱりいい家で暮らしているのね」と言った。

家に上がり、俺は緑茶を女に出した。興味深げにそれを眺めて、女は口を開いた。

「なにこれ？」

「なにってお茶だが」

「お茶？ 緑色しているけど」

「そりゃ緑茶だからな」

女は腕を組んでなにやら思案しているようだ。ただの緑茶がそんなにめずらしいか。そうか、こいつ外国人なんだな。

「大丈夫だよ。毒なんか入ってないから」

「これが日本で伝統的に飲まれてきたというお茶ね。なるほど実際にお目にかかるのはこれが初めてだわ。興味深いわね」

「さっさと飲んだらどうだ」

「そうね」

恐る恐るといったふうに湯呑を手にとると、緑茶を口にした。

「苦い。けど奥深い味ね。香りも気に入ったわ」

「そりゃよかったな」

「そういえばこういったとき日本では粗茶ですがって言うのが慣習じゃないの？」

「図々しい。」

「お前、名前は？」

「サラ。サラ・ロベスティーニ」

やはり外国人か。しかし怪しい。家にあがってからもフードを被ったままだし。

「お前、そのフードとらなくていいのか」

不気味だぞ、ということは口にしないことにした。

「そうね。いつまで隠しておいてもしかたないし、とってしまってもいいわ。どのみちこれから色々説明しないといけないわけだし」

「そうだな。俺も色々聞きたいことがたくさんある」

女はさっとフードをとった。その姿を見た俺は驚いた。透き通るような白い肌。長いまつげ。切れ長だが大きな青い瞳。長い耳…。長い耳？

「なによ。鳩が豆鉄砲食らったような顔して」

「いや、驚いた。お前、その耳、作り物か？」

「何言ってるの。本物よ」

「何言ってるのはお前のほうだろ。作り物以外考えられないだろ。その長さ」

「失礼ね。本当に本物よ」

あれか。コスプレってやつか。心底コスプレを愛してやまない人種なんだな。二次元と三次元の区別のつかない頭のおかしいやつ。そんな変態が俺の目の前にいる。

しかし公園での一件。あれはなんだ。妙な言葉を発したかと思うと俺の体を緊縛してきた。口答えすると俺の首を絞めてきた。

「ふふ。不思議でしょう。恐ろしいでしょう」

「なんだと」

「私の存在が不思議で不思議で堪らないといった表情しているわよ、あなた」

「くっ……」

「いいわ。説明してあげる」

そう言うと女は自分自身のことを語りだした。

「私の名前はサラ。されはさっきも言ったとおりね」

「ああ」

「単刀直入に言うとね私は異世界からこっちにやってきたのよ」

「異世界だと」

サラはくすくす笑った。

「あなた、いちいち反応が面白いわね」

「だってお前。話があまりにも唐突で」

「異世界からやってきたと言え、この耳のことも。それからさっき私があなたにかけた呪術のことも説明がつくでしょう」

「俄かには信じがたい話だが」

「信じてもらわないと困るわ。これから共同生活を送るのだから」

「共同生活？ なんの冗談だ」

「さっき公園でも言ったとおり、私はあなたにある呪術をかけたの」

「パイプラインがどうのとかいう、あれか」

「そう。あの術はね、私という存在をこの世界に維持するために必要なものなの」

「なんだってそんな」

「この世界で生きていくために」

サラの眼光が鋭くなった。

要するにこいつはこっちの世界に逃亡してきたらしい。その寄生先が俺だったということだ。なぜ俺だったのかといえば、まず第一に健康体だったこと。これは俺も自信があったから納得といえば納得だ。その点、中学高校大学と体育会系だった俺は、まさに寄生先としてはうってつけだったらしい。第二に俺に生活力があつたこと。サラの設定していた条件は未婚で収入1000万以上。ま、それも俺が無職になる前、ばりばりのエリートだったころの話だが。

「まったくの大誤算」

「ほっとけ」

「ほっとけるわけじゃないでしょう！ さっきも言ったとおり一度繋げたパイプラインはそう簡単に解除することができないのよ」

「そこが解せないんだよな。繋げることができるなら外すことだってできるはずだろう」

「あなたね。私が簡単に術を行使していると思っているのかもしれないけど、それは間違いよ。いかに私が天才だっていってもこの手の術を習得して行使するには血の滲むような努力と魔力を必要とするのよ。とっても複雑な機構があなたと私の間には構築されているの。そのとっても複雑な機構を作るのはとっても大変なのだから、外すのだってとっても大変なのよ。詳しく説明することはできないからこんな抽象的な表現しかできないけど」

「要するにこれでもかってくらい糸がこんがらがっているから、それを解くのが難しいってということだな」

「まあ、簡単に言ってしまうえばそういうことね。ああそれにしても大誤算。計画が完璧に狂ってしまったわ」
悲嘆するサラ。やれやれ。

「お前の目的は異世界からこっちの世界に逃亡すること。そして俺に寄生してこっちの世界で逃亡生活を送ることだったんだな」

「そうよ。ああ！ あなたが無職になりさえしなければ、こっちで平穏無事な住まいと暮らしを手に入れることができたのに。そしてこの大好きな日本の文化を思う存分愛でることができたというのに」

「それは悪かったな。そんなに日本のこと好きだったのか」

「小さい頃からずっと憧れていた。この世界に旅した人たちの手記を読んで。ああ、いつか行ってみたいと思っていたの。千里眼が使えるようになってからは水晶でこっちの世界のことをずっと眺めていたわ。特に日本が大好きだったの。オタク最高！ いつか私も牛井くってアニメ見てアキバ行ってやろうと思っていたのに！」

筋金入りの日本オタクか。こいつ。変な異世界人。

サラは腕組みをして部屋の中をしばらくうろつくと、俺を見下して言った。

「こうなったら仕方ないわね。あなたと私はもはや一蓮托生。切っても切り離せない関係にある。そんな私たちが今一番しなければいけないことがなにかわかる？」

「わからん」

「頭が悪いわねあなた。私は逃亡生活を送りたい。だけどあなたは無職。このままでは二人共行き倒れになってしまう」

「ああ。そうなるかもな」

「それを避けるためにもしなければならぬこと。そう。それはあなたが新しく職に就くことよ！」

「なんだと」

「そして身の整理をするの。あなた無収入なんだからこんないいマンションに住んでいたらだめ。すぐ破産よ。それから売れるものは全部売ってしまうの。あなたいい車に乗っていたわね」

「なんでそんなこと知っている」

「だってずっとあっちの世界から観察していたもの。それも全部売る。売ってお金に換えなさい」

「無茶苦茶だ」

俺は泣きたい気分になってきた。なぜこうも不幸が続くんだ。会社をクビになったあげく、わけのわからんやつに借金取りまがいのことをされるなんて。俺はサラを見上げて言った。

「なあ、俺のことずっと眺めていたんだろう。ならわかると思うが、俺ってプライドの高い人間なんだ」

「そのようね」

「だから前の会社以下のところに就職するのはいやだ」

「なにを言っているの！ ばか！」

ばかとはなんだ異世界人。こうなりゃやけだ。俺は立ち上がりサラにメンチを切って言ってやった。

「だがバイトならやってもいい」

「バイトって？ アルバイトのこと？ あなた正規雇用ではだめで、非正規雇用ならいいって言ってるの？」

「そうだ。働いたら負けだ。とは言わんがこのご時世、普通に就職しても社畜になるのが関の山。ならば俺はフリーターになる！」

「あなた、とんだ馬鹿者ね！」

「なんとでも言うがいい。俺は決めたんだ」

こいつの言うとおりになって社畜になって思うようにされるならば、いっそのことフリーターになって共に底辺の生活を送ってやろうじゃないか。味わうといい。長らく続く日本のデフレを！ はははは。

「わかったわ……。もうアルバイトでもなんでもいいから収入を得る手段を作らないとね。あなた頼れる身内もないようだし」

「その通りだ。俺は天涯孤独の身だからな」

「全然かっこよくない」

「さあ、なんのバイトにしようかな！ はははは！」

「喜んでるところ申し訳ないけれど、もう一つ懸念事項があるのよ」

「なんだ。なんでも言ってみろ」

俺はなんだか妙なテンションになっている。サラが呆れた口調で言ってきた。

「魔力の補填に関して」

「魔力？」

「そう、魔力。私が呪術を使うための魔力。ま、正確に言えば魔素っていうんだけど。その補填の方法を考えないと」

「なんでそんなこと考えないといけないんだ？ 魔法を使わなければいい話じゃないか」

「それができればどんなにいいことか。でもだめよ。最低限水晶を使ってあっちの世界の動向を確認しないと。言ったでしょ。私逃亡してるって」

「追っ手がくるのか？」

「ま、簡単には見つからないと思うけど。こっちに来るときに入念に痕跡を消しておいたから」

「ふーん」

「それから、もし追っ手がこの世界にやってきた時に私の存在を感知されないように、結界も貼らないといけないの。私自身にね。それを維持するのにも魔力が必要になってくるの」

「いろいろ大変なんだな」

「他人事のように言わないで。あなたにも関係することなんだから」

「具体的にはどうするんだ？」

「幽霊を成仏させる」

「はあ？」

俺はつい素っ頓狂な声を上げてしまった。

「要するに、幽霊が成仏するときに魔素ってやつが発生するんだな」

サラが頷く。俺にゴーストバスターズにでもなれっていうのか。

「バスターしたらだめよ。あくまで成仏してもらうの。そうしないと魔素は手に入らない」

厄介だ。わざわざ交渉して成仏させないといけならしい。随分迂遠な方法だな。

「幸い私と繋がったことであなたも靈感のようなものを有しているはずよ。私とあなた、二人共幽霊のことができるわけ」

背筋がぞっとする。

「ま、待て。俺は見えなくていい。昔からそっち系の話には弱いんだ」

「無理だって。パイプラインが繋がっている以上、私の魔力も一定以上あなたに流れこむわけ。だから不可分なのよ。私が幽霊を感知できるってことは、あなたも幽霊を感知できるってこと」

「くそう！つくづく厄介だ」

「観念なさい。さっきの公園にも数体いたわよ。試しに見に行ってみる？」

「御免こうむる。お前だけでなんとかすればいいじゃないか」

「いいわよ。しばらくの間は。ま、そんなこと言っててもいずれその目で拝むことになるわよ」

「くそう」

こうして、俺とサラの奇妙な共同生活が幕を開けることになった。

つくづく思う。今まで味わうことのなかった不幸がいつべんにやってきたのではないかと。

俺は自分の運命を呪った。

神も仏も俺のことを見放した。

いや、もしかしたら天界で俺のことを「おほほほほ」と嘲笑うことすらしているかもしれない。

くそう。俺は決めた。もう神も仏も信じない。

もうすっかり使い慣れた原付のエンジンをかけ、ヘルメットを被った。

「やれやれ、今日も今日とてバイト生活」

嘆息すると、俺はバイト先に向けて発進した。

あれから車を泣く泣く売却し、バイト先を決めて、引越しをすませた。今は単身者用のワケあり物件に肩身のせまい思いをしながら暮らしている。ワケあり物件だということで連帯保証人もいらなかったし、単身者用の物件に二人で住むことにも何も言われなかった。俺がフリーターだということにも。実はけっこう懸念していたことなのだが、大家さんは「どうぞどうぞ」といったように俺たちのことを受け入れてくれた。だがもうひとつの懸念は当たってしまった。俺たちのアパートにはもう一人の住人がいる。

近藤さんだ。いわゆる地縛霊というやつだ。

サラはすっかり近藤さんと仲良くなってしまった。今朝も近藤さんと仲良く二人して、

「いってらっしゃーい」

などと朗らかな声であいさつをしていた。

まったくサラのやつどういった神経をしているのか。まあ、あいつの気持ちもわからなくもない。あいつは独特の容姿をしているので日中外出することは滅多にない。なんといってもあの耳が問題だ。あの耳を隠すためには厚手のパーカーのフードをすっぽり被る必要がある。そんな怪しい格好で日中うろろうしていたら職務質問を受ける可能性大だ。そんなわけでサラはほとんど引きこもり状態だ。そんなサラの話相手になっているのが近藤さんなのだ。

近藤さんは成仏しないのかって？ それもまた問題だ。

この近藤さんとかいう女性霊。どうもこの世に未練があるらしく、なかなか成仏しようとしなない。

「私、どうしても成仏したくない」

「いいよいいよ。私の話相手になってくれてるんだから」

「そうよね。私もサラちゃんのこと大好き」

「マブダチってやつだね。私たち」

あほかこいつら、としきりに俺は思った。近藤さんにどういうわけで死んだのかと聞けば。

「それは話したくない」

の一点張りだ。

サラもこの点は気になっているらしく、さりげなく聞き出そうとしては失敗している。

そんなわけで俺の日常生活はいよいよ奇っ怪さを増し、ファンタジーとホラーをないまぜにしたような様だ。まったく厄介なことこの上ない。そう思いながら俺は原付の速度を速めた。

バイト先に到着した。俺のバイト先は複合商業施設の中にあるお好み焼き屋だ。そこで俺は厨房担当として働いている。なぜ俺がこのバイトを選んだのかといえば、俺の唯一ともいえる趣味が料理だったこと。そして時給がそこそこよかったことだ。

入りたての頃は苦労した。なんといってもプライドの高い俺のことだ。まず人に指図されるのが苦痛だった。時には自分より一回りも若い大学生に教を請わなければならないこともあった。しかし、三ヶ月も働いていると、だんだんこの職場にも慣れてきた。今日も朝からラストまでのシフトだ。

「おはようございまーす」

飲食店でのバイトのあいさつは決まって「おはようございます」だ。

「おはようございます。鷺崎さん」

「おう。米倉くん。おはよう。元気かい？」

俺があいさつを返した相手は米倉蒼梧くん。俺よりも長く働いている大学生だが、自然と俺の方が立場が上

になってしまった。

「今日は社員なし。バイトだけで回さなきゃいけないのか」

「そうです。大変そうだなあ」

「大丈夫大丈夫。なんとかなるって」

とは言ったものの、その日はなにかが起こりそうな気がした。

ハプニングが起こったのは午前中だ。店のお好み焼きはいわゆる広島風だ。広島風お好み焼きを作るには大量のキャベツの千切りを使う。その仕込みをしている時に事件は起きた。なんと専用のキャベツの千切り機が故障してしまったのだ。残り十玉ものキャベツを残して。仕方なく俺がこの手でキャベツを千切りするはめになった。この店で一番切れる洋包丁を使いたかったが、あいにく見つからなかった。仕方なく別の包丁で代替することにした。なんとかその場を乗り切った。

夕方四時半を回ると一旦店じまいをする。そこで遅めの昼飯をとることになる。今日のまかないはカレーだ。毎度お馴染みのこのメニューを食べながら俺たちは談笑していた。

「鷺崎さん。聞きました？最近ここらへんで物騒な事件が相次いで起こっているそうですよ」

「へー。物騒な事件っていうと？」

「連続殺傷事件だそうです。その犠牲者の一人がなんと小学生に上がりたての子供なんですって」

「そいつ。死んだの？」

「ええ。殺られちゃったみたいです」

「なんてこった。死んだのはそいつ一人？」

「はい。包丁でぶすり、だそうです」

「犯人は？」

「まだ捕まってないそうです」

「場所は？」

「それが近所の公園なんですよ。こっわー」

「ふむ」

俺は頭の中でよからぬことを考えていた。いい感じの幽霊になってそうだな。

俺はサラとの会話を回想した。

「いい感じの幽霊？」

サラの発した言葉に俺は疑問を呈した。

「そう。いい感じの幽霊よ」

サラは一定の魔法を行使しなければならないので、魔力の補填をしなければならない。どういった方法で魔力を集めるのかといえば幽霊を成仏させること。

「だからいい感じで成仏しやすい幽霊を見つける必要があるの」

なぜかしきりに近藤さんがこくこくと頷いていた。

「近藤さんは？」

「だめだめ、貞子は私の友達だし、れっきとした地縛霊だもん。全然成仏できないわ」

近藤さん、またも頷く。貞子というのはサラが近藤さんにつけた渾名だ。この渾名に異論はないらしい。サラの傍若無人ぷりに何も文句を言わないなんて。近藤さん、あなたいい人だ。いや、いい幽霊だ。

「私もいろいろ試してみたんだけど、幽霊ってけっこう怨念強いわよ。なかなか成仏しないのが多いの」

考えてみればそうだ。この世に未練がなければさっさと成仏してそうだ。

「だから死んで間もないとか、とにかく成仏しやすいような幽霊にターゲットを絞っていかないと。効率的に、ね」

「というかお前。一人でも幽霊成仏させたことあるのかよ」

「な、なに言っているの。あるわよ…一人だけ」

呆れた。なんのために深夜に徘徊しているんだこいつは。

「魔力の方は？大丈夫なのか。残量やばいんじゃないのか」

「ま、まだ大丈夫よ」

サラは明らかに焦っている。本当に大丈夫なのか。

そんなわけで俺はその小学生くんが「いい感じ」の幽霊になっていそうだと考えたのだ。

俺の頭の中もこの数ヶ月でだいぶまじでやばい方向に進んでいる気がする。でも、仕方がないだろう。だって異世界人と幽霊と共同生活を送っているんだから。

通常の人間の頭では理解しがたい世界を俺はいままさに生きているんだ。

幽霊もわりとはっきり見えるようになったし。

「驚崎さん。なに深刻になって考えているんですか？」

「いや、なんでもないさ」

仕事を終えた俺は帰りに殺傷事件があったという公園に立ち寄ってみることにした。なるべく物騒な場所には寄りたくなかったんだが、興味本位だ。断じてサラのためではない。

「ここか」

ごくごくありふれた住宅街の中の小さな公園だった。こんな場所で殺人事件が起こったなんて俄かには信じがたい話だ。事件があってからしばらく経ったのだろうか。テレビやなんかで見かける事件現場にかかる黄色いテープのようなものは存在しなかった。

公園内をざっくり見渡す。するとブランコに座る小さな男の子の姿を発見した。

いたな。まず間違いなく幽霊だろう。こんな時間に子供がブランコに座っているはずがない。生きている子供だとしたら、とんだ不良息子だぞ。俺は彼に近づいた。

彼は寂しそうな目で虚空を見つめていた。俺が近づいても何の反応も示さない。声をかけてみることにした。

「やあ」

「――」

今度はかがんで目線を合わせて。

「やあ、君」

「――」

相変わらず何の反応も示さない、おかしいな。俺のことを警戒している？ そんなふうには見えないが。相変わらず虚空を見つめている。

仕方ない。俺は帰ることにした。何の反応も示さないんじゃないな。放っておこう。同情はするよ。アーメン。

アパートに帰り、部屋の鍵を開ける。

「ただいま」

リビングの方からテレビの音がある。お笑い番組でも見ているらしい。それにしても主人が帰ってきておかえりの一つもないのか。

リビングのドアを開けると、やはり二人してテレビを見ていた。

「ただいま」

「ん、おかえり」

サラはこちらの方を向かずに返事をした。相からず図々しいやつ。

「おかえりなさい…」

その点近藤さんは愛想がいい。ちゃんとこちらの方を向いてあいさつをくれるのだから。

しかし近藤さん。なぜあなたはこちらの方をじっと見ているんですか。なんか怖いですよ。あなたのそういった眼差し。いまだに俺慣れません。

「近藤さん。なんですか？」

「いえ……どちらさまですか」

「いや、俺は鷺崎ですけど。なにを言っているんですか」

「そちらのかた——」

近藤さんはゆっくりと俺の方を指さした。いや、正確には俺の背後を指さしているのだろう。

まさか。俺は後ろを振り返った。

そこには先ほどの少年が佇んでいた。

俺とサラは腕組みをして少年のことを眺めていた。

「連れてきちゃったのね」

「そうみたいだ」

「憑いてるってことね」

「なにを恐ろしいことを。断じてそんなことはない」

「ふーん」

サラは腕を組んでなにやら思案顔だ。しかし幽霊を連れてきてしまうとは。不覚。こんなことが起こらないようにと普段は幽霊らしき存在とのコンタクトをとることを自分に禁じていたというのに。一種の気の迷いが俺に失態を演じさせたのだ。不覚。

「君名前は？」

サラが少年に尋ねた。

「……」

「名前なんて聞いているの」

少年はただ俯いたまま黙りこくっている。

「優。この子なにも反応を示さないわ」

それはわかってる。俺が公園で話しかけたときも同じ感じだった。

「困ったわね。これじゃ成仏させたくても何もできやしないじゃない」

俺たちが困っていると近藤さんがゆっくりと少年に近づいた。

「お名前教えてくれる？」

近藤さんが優しく少年に尋ねた。するとどうだろう。さっきまで何の反応も示さなかった少年がゆっくりと顔を上げたのではないか。そして少年は口を開いた。

「さとり」

「さとりくんっていうの。上の名前は？」

「ささき」

「ささき、さとりくんっていうのね。わたしは近藤直子。こっちの二人はサラさんに優さん」

「サラ……すぐる……」

「そうよ。何も怖がらなくていいからね」

やった。なんとかコンタクトに成功したぞ。でかした近藤さん。

「貞子ナイス！ さとりくん。私のことわかる？」

「わかる」

「じゃあ、こっちのおじさんの方は？」

「わかる。おじさんたち僕のこと見えるの？」

おじさん呼ばわりされたことは心外だが、ひとまずよしとしよう。だんだん応答がはっきりしてきたかんじ

だな。

「見えるとも。さとりくん、君は……」

俺は少年に質問しようとして口をつぐんだ。

君は殺されたのか？

そう尋ねるわけにもいかない。なら、どうするか。

俺が悩んでいるとサラが少年に話しかけた。

「さとりくん。君は死んだの。残念なことだけど。その自覚はある？」

少年は少し戸惑った様子であったが、静かに頷いた。

「やっぱり僕死んだんだね」

「そうよ」

「やっぱり。僕、色んな人に話しかけたんだ。でも皆僕のこと見えてないみたいで。公園で待っていても誰も迎えに来てくれないし。それに、おなかが空かないんだ」

サラも近藤さんも神妙な表情になった。幽霊になったのだから当然だろう。肉体を失えば、それを維持するための食事も必要ない。俺は疑問を口にした。

「家には。家には帰ってないのか？」

「一度だけ、帰ってみたことがあるんだ。でも、インターホンを押すこともできないし。僕、お母さんと二人暮らしなんだけど、お母さん出てこないし」

母子家庭か。息子を失ったショックで家に引きこもっている？いや、こういう場合は実家に帰っているんじゃないのか。サラが少年に尋ねる。

「ねえ、さとりくん。何か思い残していることはない？」

おいおい。単刀直入すぎるだろ。何が何でも魔力の補填を優先したいのか？

「思い残していること？」

少年はすこし思案して口を開いた。

「難しいけど。でも、僕自分がなんで死んだのか分からないんだ。それが知りたい。それからお母さんにも会いたい」

自分がなんで死んだのか分からない？そんなこともあるのか。

「ね、優。さとりくんは何で死んだの？」

サラが俺に尋ねた。言うべきか？事実をこの少年に。ショックを受けるんじゃないのか。

しかし、俺は意を決して少年に言った。

「君はおそらく殺された。犯人はまだ捕まっていない」

俺は事実をそのまま告げることにした。

「殺された……」

少年はやはりショックを受けたようだった。微かに心が痛む。

「殺された？優、それ本当なの？」

サラが驚いた様子で俺に尋ねる。

「ああ。本当だ」

「殺されたなんてことそのまま言っちゃって、さとりくんショック受けてるじゃない」

「だからって嘘をついても仕方がないだろう」

近藤さんが心配そうな表情でさとりくんに尋ねる。

「さとりくん。大丈夫？」

少年は静かに頷くと、

「大丈夫」

と言った。随分気丈な少年だ。俺は素直に感心した。

しばらく少年は黙っていたが、意を決したような表情になって少年は俺に言った。

「犯人はまだ捕まってないんだね。なら僕、その犯人を捕まえたい」

なんだって。それは無茶だろう。警察もまだ犯人を逮捕することができていないのに。まして幽霊のさとるが犯人を捕まえるなんて。

「いいわね。面白そう」

サラが信じられないことを口にした。

「おいおい。サラ。お前何言ってるんだ。犯人探しに一役買おうっていうのか」

「そうよ。私の魔術を使えばなんてことのないことよ」

こいつ楽しんでやがる。しかし。

「魔力の残量、気になるんじゃないのか」

「大丈夫よ。おそらく水晶を使うくらいで済むはずだから」

水晶使うのでどのくらい魔力を消費するのは分からないが。

「こういうのは警察にまかせておくのが一番いいと思うぞ。下手にちょっかいを出さないほうが」

「未解決事件を解決するなんて痛快極まりないじゃない。私決めたわ。絶対に犯人を捕まえてみせる！」

ふんふん、と鼻息荒く意気込んでいるサラ。やれやれ。

「で、どうやって犯人を見つけるんだ？」

「それは水晶を使って…」

サラは口をつぐんだ。どうした？

「水晶を使うとしても手がかりが必要なよね…。でもさとるくんはどうやら記憶を失っているみたいだし。どうしたものかしら。犯行現場に行ってみようかしら」

「今からか？」

「今から」

幸い犯行現場の公園には俺たちの部屋から徒歩でもいける距離だったので、俺たちは歩きで向かうことにした。俺、サラ、さとるの三人で。サラが口を開いた。

「なにか手がかりが見つかるといいけど」

さとるの方を見てみた。さとるは幾分凜々しい表情をしている。本当に気丈なやつだ。

俺は密かに何も見つからないことを期待した。こういうことは警察任せにしておいたほうがいい。犯人は犯行現場に寄り付くと聞く。危険だ。

結果から言えば、犯行現場では目星いものは何も見つからなかった。俺は密かに安堵した。

家に帰ると、サラが口を開いた。

「仕方がないわね。少し占ってみようかしら」

「占い？」

「ええ、犯人の姿が見えてくることはないと思うけど、なにかわかるかもしれない」

そう言うと、サラは水晶玉を手にとってなにかつぶやき始めた。ぼうっと水晶玉が光る。それをサラが目を細めて覗き込む。

「驚いた。優。犯人ね。あなたの身近な人って出てるわ」

「え……」

俺も驚いた。俺の身近な人？誰だ。サラが俺に尋ねる。

「なにか心あたりはないの？」

「うーん。わからん」

「頼りないわね。もっとよく考えて」

「うーん」

その時、俺の頭の片隅にちらりとある人物の名前が浮かんだ。

「まさかな……」

「なに？誰かわかったの？」

「いや。なんでもない。なんでもない」

俺はぶんぶんと頭を振った。まさかあいつに限って。

「なによ。思いついたことがあるなら教えなさいよ」

「だからなんでもないって。さ、今日はもう寝るぞ。明日もバイトあるんだから」

そう言って無理やり俺は自分の寝床に行った。

まさか、あいつに限って。俺は自分の悪い予想が当たらないことを願った。

翌日、バイト先に着く。

「おはようございます」

「おう、おはよう。鷺崎ちゃん」

社員の店一番の巨漢、藤井さんが俺を出迎えた。藤井さんが神妙な顔をして俺に近づいてきて、言った。

「鷺崎ちゃん。ちょっと困ったことがあったんや」

「困ったことって？」

「それが――」

藤井さんの次の言葉を聞いた俺は絶句した。

俺の悪い予想が当たってしまった。

その日は久しぶりのはや上がりだった。普段ならば少し気分が高揚した状態で帰るのだが、その日は複雑な感情を抱えたまま家路についた。

玄関のドアを開ける。

「ただいま」

あいかわらず返事はない。リビングのドアを開けると、三人して夕方放送のアニメを見ていた。

「ただいま」

「ん、おかえり。優。このアニメ見なさいよ。なかなか奥が深いわよ」

サラがめずらしく俺の方を向いてあいさつをよこした。

「優？ なにかあったの？ 顔色が悪いわよ」

そうか。ま、そうだろう。

「犯人、捕まったよ」

「うそ」

「ほんとだよ。お前の占い当たるんだな」

犯人の名前は、米倉蒼梧。

俺の同僚だった男だ。

赤い笑顔

さとの母親の生家は海に見える街にあった。

俺はレンタカーの傍で海を眺めながらたばこを吸っている。車内は禁煙らしい。サラはたばこの煙が苦手だ。

犯人は捕まえることができなかった。だからせめて、さとのもうひとつの願い。母親に会いたいという願いは叶えてやりたくて、俺たちは遠路はるばる伊豆の街までレンタカーを借りてやってきたのである。さとの母親がどこにいるかということはサラの水晶玉を使って調べた。やはり予想していたとおり、さとの母親は実家に帰っていた。正直言えば、貧乏な俺たちにとってレンタカーを借りて、この街までくることは相当の痛手だったのだが、仕方がない。車の窓が開いて、サングラスをかけたサラが俺に声をかけた。

「優。そろそろ行くわよ」

「おう」

しばらく車を走らせると目的地にたどり着いた。緑色の屋根の家。表札には「佐々木」の文字。ここだ。

「ここに間違いないな。さとる」

「うん。おばあちゃんの家だよ」

さて、目的地に着いたのはいいもののこれからどうするかは考えていなかった。どうやって中に入れてもらうか。いや、さとるだけ行かせるか。

「それはだめよ。もしさとるくんが成仏しちゃったときに私がそばにいなかったら、魔素を収集できないじゃない」

そうなのか。しかし、どうやって…。

「考えていても仕方がないわ。行くわよ優。さとるくん」

「え……」

サラはさっさと行ってしまった。おいおい、どうするつもりだ。俺とさとるは仕方なくサラの後をついて行った。

サラがインターホンを押した、しばらくして女性の声が聞こえてきた。

「はい」

サラが応答する。

「こんにちは。私さとるくんの友達の鷺崎という者ですが、さとるくんに借りていたゲームを返したくてこちらに参りました」

なんだって。俺は小声でサラに言う。

「おいおい。ゲームなんて持ってきたのか？」

「持ってきたわ。クリア済みのゲームをね」

「おい。買ったのか」

「買ったわ。ネットで」

おいおい。勝手に買ってんじゃねーよ。

インターホンの声の主はなにか考えているようだったが、しばらくして、

「わかりました。少々お待ちください」

という声が返ってきた。

玄関から顔を出したのはやさしそうな女性だった。

「おばあちゃんだ！」

さとるが声をあげた。俺もあいさつをしなくては。

「どうも、こんにちは。鷺崎です」

「こんにちは。さとの祖母の佐々木早苗です」

さとの祖母は優しく微笑んだ。俺とサラという怪しい人間がいるというのに、優しく微笑んだ。目元がさとのに似ているな。

「あら……驚いた……」

早苗さんが口をおさえて言った。早苗さんはさとの方を見ている。まさか。

「さとの……さとのもいるのね」

俺とサラは顔を見合わせて驚いた。

俺たちは早苗さんの家、つまりさとの母親の実家に上がらせてもらった。

早苗さんにはかすかにさとの存在が感じ取れるらしい。俺たちはさとの墓前に線香をあげると、居間でお茶を出してもらった。さとのが実際にそばにいるのに、線香をあげるとするのは少し違和感を覚えた。

「突然やってきて申し訳ありません」

俺は早苗さんに頭を下げる。サラもフードを被ったままだが、頭を下げた。早苗さんも頭を下げる。

「さとのがお世話になったようで。こちらこそありがとうございます」

「いえいえ。さとのくんのことが見えるなんて思いませんでした」

「私も少しだけ靈感あるのよ」

ほほほ。と朗らかに早苗さんは微笑む。続いてさとの方を優しく見る。暖かい眼差しだ。

「姿はなんとなく感じ取れるんだけど、声は聞こえないのよねえ。残念だわ」

近くにいるのに声は聞こえない。それはどういった感情をもたらすのか。俺にはわからない。

さとのはにこにここと笑っている。二人のことを見ていたサラが口を開いた。

「さとのくんのお母さんはどこに？」

こいつはいつも単刀直入すぎる。

「美香ね……。あ、美香ってこの子の母親の名前だけど、たぶん海を見に行ってる」

「海ですか」

「こっちに帰ってきてから、しばらくは塞ぎ込んでね。でもある日から外に出るようになったのよ。それでどこに行ってきたの？って聞いたら、海って。それから毎日海を見に行ってるみたいなのよねえ」

居間には西日が差し込んでいた。もう夕方か。時計を見ると四時をまわっていた。俺は出された菓子には手を出さないでいたが、サラはばりばりとせんべいをかじっている。図々しい。相変わらず図々しい。

「海、行きましょっか」

早苗さんが唐突に言った。

俺たちは海岸を歩いた。

夕日が眩しい。俺もサングラスが欲しい。

歩いている最中、早苗さんはさとのや美香さんのことを色々と話してくれた。

二人が好きな食べ物のこと。二人が好きな映画のこと。二人がどんなことで喧嘩をしたのか。どんなことで喜びあったのか。

それを話す早苗さんの笑顔は、慈愛に満ちていた。

早苗さんも二人と時間を共有している人間だったんだ。それが一つ、欠けた。

それを何かで埋めることは可能なのか。可能だとすれば何なのか。

しばらく歩くと、一人の女性の姿が俺たちの目の前に現れた。

「おかあさん！」

さとのが彼女のもとに駆け寄った。さとのは無邪気に母親の周りを走り回っている。その姿を見て、早苗さんは目を細めていた。俺は複雑な気分になる。

俺たちは美佳さんに軽く自己紹介をした。さとのの友達だと。それは半分うそで、半分本当だ。

サラが美香さんにゲームを手渡した。

「これ、さとるくんが好きだったゲームです。お返しします」

正確には俺の金でサラが買ったものだが。

サラから手渡されたゲームをじっと見つめて、美佳さんはため息をひとつついた。

「そうよね。あの子ゲームばっかやってた。宿題そっちのけで」

それは親としては心配なことだったろう。俺も小さい頃は学校が終わると遊びまわってばかりいたから、よく母親に怒鳴られていたっけ。

「でもゲームだけあってもね」

「さとるくんもいますよ」

サラが真実を口にした。美香さんはなにも言わずゲームを見つめている。

「さとるくんはあなたのそばにいます」

「サラさん。あなた優しいのね」

美佳さんはサラに優しく微笑んだ。しかしその微笑みには何か冷たい感情が付与されている気がした。

美香さんの長い髪が風に遊ばれて、たなびく。

さとるはそんな母親の横顔をじっと見ている。

「でも、さとるはいないわ」

真実はこの人の目に映らないのか。早苗さんはなにも言わない。

「私は生きている。あの子は死んだのに」

美佳さんはつぶやくように言った。あまりに小さい声なので、潮騒の音にかき消される。しかし、かろうじて聞き取ることができた。

美佳さんの望むことは何なのだろう。さとるという一人の子供を失って、残された美香さんが望むことは。

「美香さん。あなたの望むことはなんですか？」

サラが俺の疑問を代弁してくれた。もしかしてサラには俺の心の中が見えているのではないかと思った。たぶん気のせいだろうが。

美香さんはゲームに注がれてた目線を上げ、海を眺めた。

しばらく美香さんと俺たちは海を見た。

沈みかけようとしている太陽が、地平線の付近で赤く輝いている。

唐突に美香さんが口を開いた。

「犯人の顔が見たい」

俺の脳裏に米倉蒼梧の笑顔が浮かんだ。つい最近までは同僚だった大学生。俺の知っているあいつは本当はどんなやつだったんだろう。

「そしてこの手で切り刻んでやりたい。殺したい。この手で」

美香さんの横顔が夕日に照らされている。俺はそれを見て心底美しいと思った。不謹慎かとも思ったが、率直な俺の感想は「この人は綺麗だ」というものだった。

「でもね本当に殺したいのは私。私自身なのよ。なにも取り戻すこともできないからっぼの私自信なのよ」

からっぼの自分自身。俺は自分自身のことを言われている気がした。

俺もからっぼだった。

「もう戻ってこないの。私がどんなに必死に生きても、あの子の笑顔は。もうあの笑顔に会うことは私にはできない。私の宝物はもう二度と戻らない。だから」

小さくなる美香さんの声がときおり波音にかき消される。

「だから殺してやりたいのよ。さとるを守れなかった私を」

美香さんの目に光るものをとらえた。

「さとりくんは、それを望んでいない」

サラがサングラスを外して美香さんに言った。

「あなたに何がわかるっていうの…あなたに何が！」

美香さんが声を荒げる。

サラは真正面から美香さんの声を受け止める。

「私の、さとの、何が。奪われたものが。なにがわかるっていうの？」

嘆きを、海の波音がさらっていく。

サラはただそれを受け止める。

美香さんは泣き崩れてしまった。それを、誰も支えることはなかった。さとり以外は。

しばらく俺たちは美香さんのそんな姿をただじっと眺めていた。

「さとりくんが望むものは、今ここにはないわね」

サラがあっさりと言う。非情。俺は苛立ちを覚えた。

「おい！」

俺の手がサラの肩を強く握る。サラの細い肩を触ったのはそれが初めてだった。

鋭い眼光のサラと目が合う。俺は何も言うことができなかった。

サラの目元に光るものがあった。俺の腕をそっと握りかえし、俺の手を自分の肩から外す。

「さとりくんが望むものは美香さんの笑顔。今ここにそれはない」

サラは俺にだけ言っている。笑顔。今の美香さんにとって一番縁遠いものかもしれない。

「美香さん。あなたの宝物はもうあなたの目の前に姿を現さないかもしれない。けど、さとりくんが望むものはあなたの生きる人生のその中にきっとあります」

サラの言葉に美香さんは何も言わない。情けないことに、俺は何も言えずにただ佇んでいることしかできなかった。

美香さんはサラから手渡されたゲームをぎゅっと胸に抱きしめていた。

「美香のことは大丈夫だから、さ、あなたたちは行って」

早苗さんはそう言うと、美香さんに寄り添った。さとの反対側に。

ああ、この人は孫を失っただけではない。

娘の本当の笑顔も失ってしまったんだな。

俺たちは無言で海岸沿いを歩いた。しかし、しばらくしてサラが立ち止まった。

無言で海を見つめるサラを見て、俺も無言で海を見つめた。

「人の死っていうのはさ」

サラが口を開いた。俺は無言でそれに耳を傾ける。

「意外とあっけなく訪れることもあるものなのよね。周りの人間にとっても、自身にとっても」

「ああ」

「でも、その事実は永遠に残り続ける」

「うん」

「生まれてきたものの宿命ね」

「うん」

「残酷よね」

俺は何も答えなかった。

サラには何か思うところがあるのだろうか。

俺は何も聞かなかった。

夕日が沈みかけていた。赤すぎるほど赤い夕焼け。それが照らす浜辺もまた赤かった。

目が痛い。俺は夕日から目を背けるように赤い海岸に目をやった。

すると向こうから人影が近寄ってくるのが確認できた。あれは――さとるだ。

さとるが向こうから駆けてきた。肩で息をするさとる。死んだっていうのに息は弾むのか。さとるは俺たち二人を見てニコニコしている。その顔を西日が照らす。

それを見て、俺は「ああ、幽霊って夕日に照らされるものなのか」と、どうでもいいようなことを考えた。さとるに向かってサラが言う。

「さとるくん、君はお母さんのことを見守りに来たのね」

さとるはサラの顔を見つめている。だんだんと息が整ってきた。

「最初から、そのつもりだった。そのために私たちを動かした」

さとるはじっとサラのことを見つめていたが、一度だけ静かにこくりと頷いた。

「ごめんね」

驚いた。さとる、お前ってやつは。随分と、聡いやつじゃないか。

「さとるってどういう漢字を書くのか知ってる？賢いっていう意味の感じで書くんだよ」

さとるはそう言うと、にかっと笑った。

「なるほど、さとるのさとるは、聡か。合点がいった」

「優。どんな漢字なの」

サラが俺のことを肘で小突く。俺は空中に「聡」という字を書いたが、サラにはうまく伝わらなかったようだ。

「どんな漢字なのよ」

サラは口を尖らせていた。それを見て俺と聡は笑った。

夕日に照らされた聡の笑顔は、美香さんの横顔と同じくらい綺麗だった。

「仕方ない。許す！」

サラが腕を組んで聡に言った。

「許すってなんだよ」

「さとるくんがもう少しこの世にいることを」

今度は腕を腰に胸を張って言った。おいおい。

「お前が許すことか。お前は神か仏か。だいたいこの日本には四十五日っていうのがあってだな」

「なによそれ。シジューゴニチ？」

「お前、日本のこと、勉強してきたんじゃないのかよ」

さとるが俺たちのやりとりを見てくすくすと笑う。

気づいてみれば、さとるはよく笑うようになっていた。

美香さんの宝物を俺たちは眺めていた。

それを見て、俺たちも笑った。

「まったくうまくしてやられたな」

帰りの車中で俺は言った。

「あの子の魂胆には実は薄々気づいてた。まだ成仏する気がないことも」

サラはサングラスをかけたままだ。もうあたりはすっかり暗くなったというのに。

「魔力の方は大丈夫なのか」

俺は野暮ったい質問をサラにした。

「ま、人生、悲喜交々ってね」

サラは難しい日本語を得意げに使った。

俺はそんなサラを横目で見て笑った。

「なによ」

「いや」

人生、悲喜交々か。

俺はレンタカーのハンドルを得意げに回す。

人生ほどではないが。

人生、悲喜交々か。

まったく厄介なことだ。